

宮ノ前横穴墓群確認調査報告

—鍛冶ヶ谷市民の森整備工事に伴う埋蔵文化財確認調査報告書—

2014

横浜市環境創造局
公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

例 言

- 1 本書は、横浜市環境創造局により委託され実施した、「鍛冶ヶ谷市民の森整備工事に伴う埋蔵文化財確認調査業務委託」にかかる確認調査報告書である。現地での発掘調査は平成25年12月9日より平成26年1月10日まで行なった。
- 2 資料整理及び報告書作成作業は、「鍛冶ヶ谷市民の森埋蔵文化財整理報告業務委託」として、平成26年10月2日より12月25日にかけて実施した。
- 3 宮ノ前横穴墓群（横浜市文化財地図／栄区No.29遺跡、神奈川県遺跡台帳／No.37遺跡）は、横浜市栄区鍛冶ヶ谷二丁目275番2ほか（北緯35度22分8秒、東経139度33分42秒）に所在する。
- 4 調査組織
 - (1) 調査主体
公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
理事長 五味 文彦
 - (2) 調査担当
埋蔵文化財センター
所 長 遠藤 廣昭
調査担当 橋本 昌幸・鹿島 保宏
調査補助員 山本 裕志
整理作業員 石井 和佳子・岡本 淳子・宮本 直子
- 5 本書の挿図の指示は次のとおりである。
 - ◎縮尺は適宜図中に示した。
 - ◎方位は全て真北を示す。
 - ◎水系レベルは標高を示す。
 - ◎特徴のある部分についてはトーンで表した。
- 6 今回の調査で出土した遺物及び記録等については、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センターに保管されている
- 7 発掘調査及び出土品の整理作業に際しては、次の諸氏・諸機関にご協力を賜った。ここにご芳名を記し深謝の意を表する。（敬称略 五十音順）
池上 悟・近野 正幸・柳下 武・株式会社三橋緑化興業・株式会社横浜技術コンサルタント・横浜市教育委員会事務局

目 次

例 言	i
目 次	ii
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査経過	3
第3章 調査成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 トレンチおよび横穴墓	5
・ 1 トレンチおよびA群9号墓	5
・ 2 トレンチ	6
・ 3 トレンチ、4 トレンチ	7
・ 5 トレンチおよびB群4号墓	7
・ 6 トレンチ	8
・ 7 トレンチ	8
・ 8 トレンチ	9
・ 9 トレンチおよびD群1墓	9
・ 10 トレンチ	10
第3節 出土遺物	10
第4章 まとめ	13
写 真	15

第1章 遺跡の位置と環境

本遺跡は、JR京浜東北線・根岸線本郷台駅の東側約1.2km、県道21号線（鎌倉横浜道）に面した丘陵に所在する。

横浜市南域に位置するこの付近は、南部の三浦半島から円海山に至る丘陵性の地形をなし、柏尾川支流の独川から延びる小支谷の発達した標高50mほどの丘陵が連なる。さらに北部では標高約80mの多摩丘陵が続いている。周囲は開発により宅地化が進むが、市内でも多くの緑地が残る地域である。地質学的には上総層群小柴層を基盤層とする。下位の大船層を整合に覆い、同層の北側を小柴海岸から氷取沢・円海山を経て小菅ヶ谷・飯島町の丘陵南端部にかけて東西方向に帯状に分布する。東側ではスコリア質の粗粒砂岩を主体とするが西に向かって泥質を強める。横穴墓の穿たれる崖面も泥質の砂岩層であった。

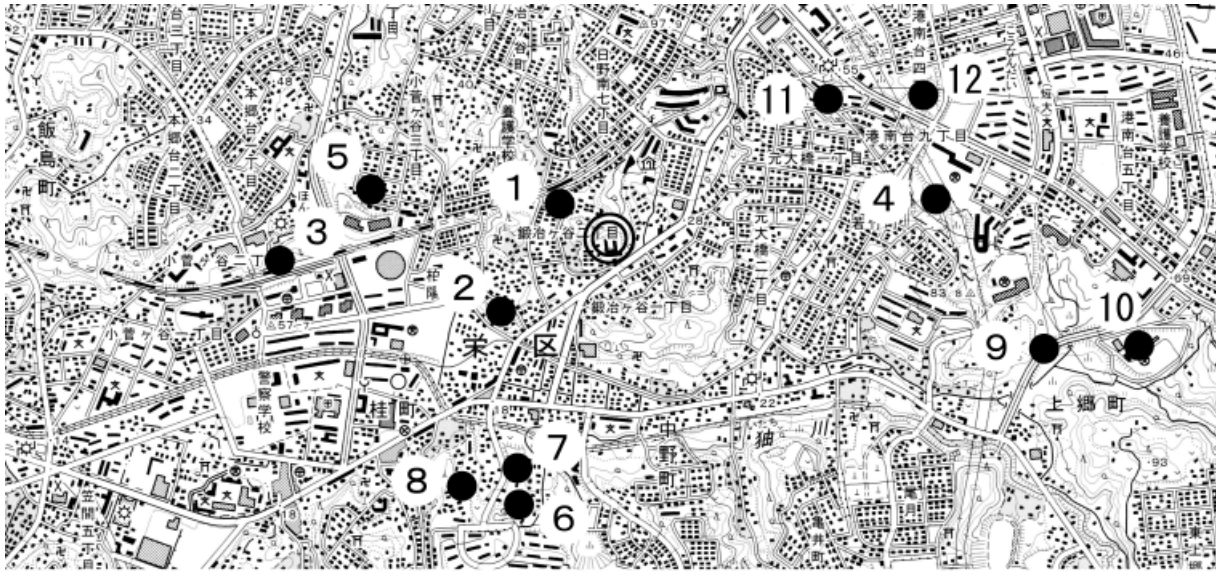
遺跡の所在する崖は、北側より南へ延びる尾根が東西に分岐する付近の南側斜面にあたる。斜面下には平場が残り竹林となっている。

本遺跡は、A群11基・B群7基・C群4基・D群1基・E群2基の計25基から成る。昭和33～34年に鶴沼女子高等学校によりA・C群が調査され、この際B・D・E群も内部が確認された。また、今回の調査の際に、E群の西にF群1基が、更に西側の谷戸に2基が所在することが判明した。

この地域には、多くの横穴墓群をはじめとする遺跡が知られている。谷戸を挟んだ北西約150mには、5群26基を数える中居丸山横穴墓群（1）が所在する。昭和32年に前出の鶴沼女子高などにより発掘調査が行われている。南西約400mの桂町遺跡群（2）では14基の横穴墓を調査した。また、西約1.2kmのJR本郷台駅周辺には、7群100基近くを数える七石山横穴墓群（3）が所在する。うち約70基が鉄



図1 遺跡の位置 (1/10,000)



- | | | | |
|-------------|------------|-----------|-----------|
| ◎ 宮ノ前横穴墓群 | 1 中居丸山横穴墓群 | 2 桂町遺跡群 | 3 七石山横穴墓群 |
| 4 松ヶ崎横穴墓群 | 5 本郷台和田遺跡 | 6 桂台遺跡 | 7 桂台北遺跡 |
| 8 公田ジョウロ塚遺跡 | 9 上郷深田遺跡 | 10 上郷猿田遺跡 | 11 榎戸第3遺跡 |
| 12 榎戸第2遺跡 | | | |

図2 周囲の遺跡（1/25,000）

道敷設等の開発に際して調査された。開発により大半が失われたが、一部市有地内に遺存する。東約1.1kmの県立明朋高等学校（旧港南台高等学校）南側崖には松ヶ崎横穴墓群（4）が残る。港南台遺跡群の一角を占め、8基の存在が確認されている。

横穴墓群以外では、西約800mに弥生時代および古墳時代後期の集落である本郷台和田遺跡（5）が所在する。南では約1.0kmに縄文時代晩期の遺跡として著名な桂台遺跡（6）や、弥生時代中期から古墳時代～奈良・平安時代の集落跡である桂台北遺跡（7）、人面把手が出土したことで知られる公田ジョウロ塚遺跡（8）などが所在する。南南東約1.5kmには7～9世紀の製鉄遺跡である上郷深田遺跡（9）が、さらに東約300mには縄文時代後期および奈良時代の集落跡・上郷猿田遺跡（10）が所在する。東北東約800mには港南台遺跡群の榎戸第3遺跡（11）、同1.1kmには榎戸第2遺跡（12）が存在する。いずれも縄文時代中期～古墳時代の集落跡である。

第2章 調査経過

横浜市環境創造局により、『鍛冶ヶ谷市民の森』整備事業が計画された。当該地には宮ノ前横穴墓群が現状保存されており、これを取込んだ緑地の整備計画である。環境創造局と教育委員会生涯学習文化財課との協議の中で、横穴墓前面の園路・フェンスおよび案内板等サインが設置される部分について、遺構の有無を確認する目的をもって、事前に試掘溝（トレンチ）による確認調査が必要と判断された。確認調査は公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センターが実施することとし、環境創造局より当財団に確認調査業務が委託された。

調査は平成25年12月9日より実施した。まず現況の写真撮影およびトレンチ設定を行い、掘削作業は11日に下段平場の2トレンチより開始した。続いて上段の1トレンチ以降の掘削を行い、これに並行して18日より横穴墓の調査に着手した。横穴墓の測量等一部の作業は年を越し、平成26年1月10日に調査が終了した。調査面積は74㎡である。

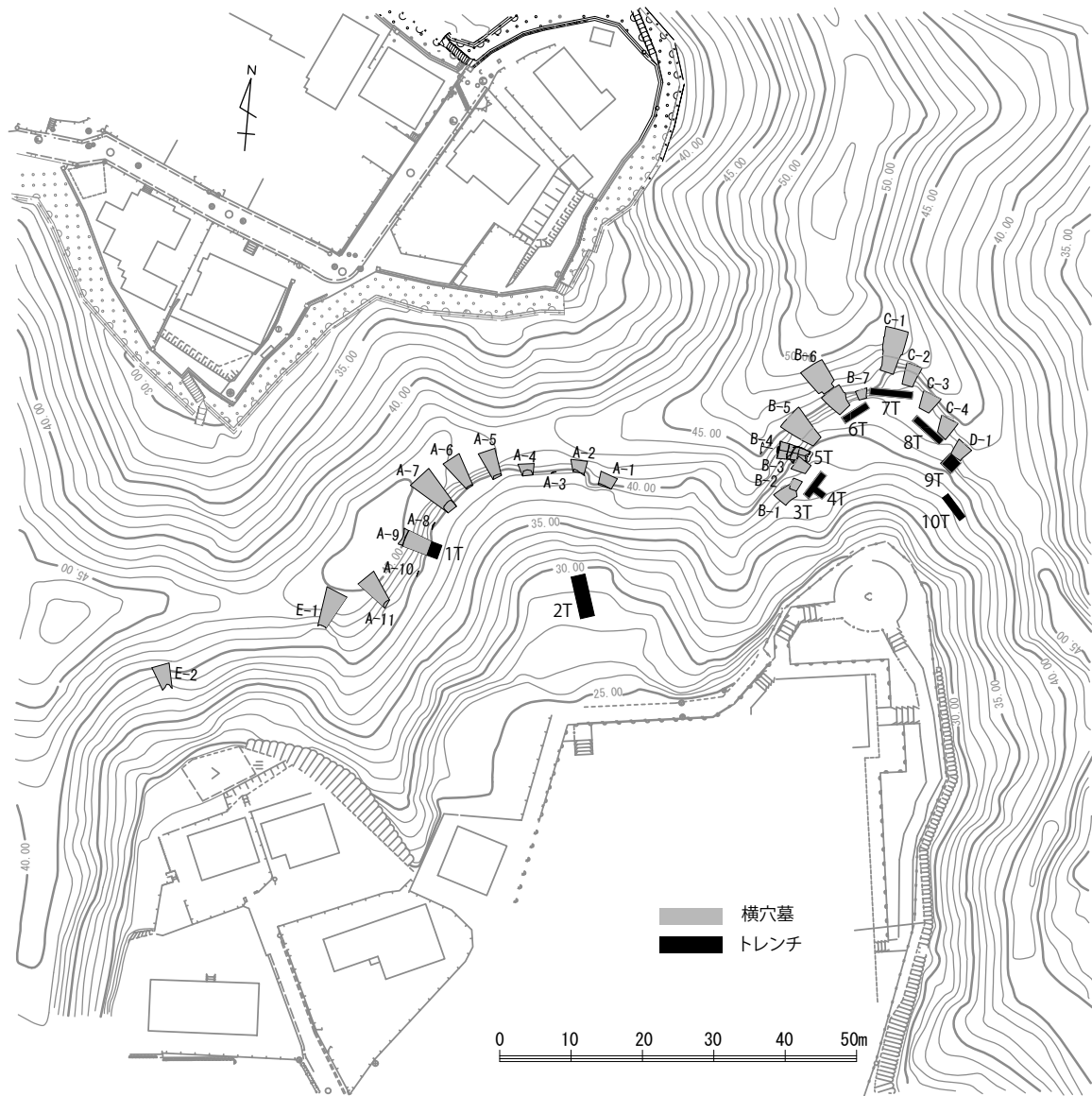


表 発掘調査にかかる届出等

文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
1 文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知					
土木工事の通知	環創公整第1820号	平成25年10月8日	横浜市長	神奈川県教育長	横浜市を經由
発掘指示の通知	文遺第61098号	平成25年10月16日	神奈川県教育長	横浜市長	横浜市を經由
2 文化財保護法第92条に基づく発掘					
発掘届の提出	横歴埋第1044号	平成25年11月28日	財団理事長	県教育長	横浜市を經由
発掘届の受理通知	文遺第50080号	平成25年12月6日	県教育長	財団理事長	横浜市を經由
3 出土品の手続き					
埋蔵物の発見届		平成26年1月17日	財団理事長	栄警察署長	
文化財保管証の提出		平成26年1月17日	財団理事長	県教育長	横浜市を經由
文化財認定と県帰属の通知		平成26年2月17日	県教育長	財団理事長	

第3章 調査成果

調査対象区内に、横穴墓前面を中心に10か所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。また、横穴墓のうち3基については内部の測量調査を行なった。

第1節 基本層序 (図4)

今回の調査はおもにトレンチ調査であることから、詳細な土層堆積状況は各トレンチの項で記述する。基本層序の概要としては、模式図に示すように腐植土からなる表土 (Ia層) および旧表土 (Ia層) 下に、崖面の崩落により混入した泥質砂岩のブロックを多含する暗褐色土 (Ic層) が厚く堆積する。また、各横穴墓の前面においては、過去の調査の際に横穴墓内より掻き出した土砂が堆積するが、崩落土との厳密な分層はなし得なかった。崖面より離れた10トレンチでは黒味の強い暗褐色 (IV層) がやや厚くみられ、基盤層である泥質砂岩層 (V層) に至る。地表から基盤層までの深さの平均は、8トレンチで0.3m、10トレンチでは0.8mを測るが、斜面に位置する1トレンチでは1.0mを越える。

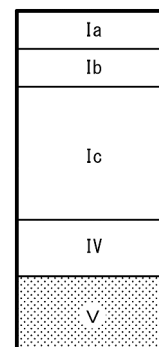


図4 土層模式図

第2節 トレンチおよび横穴墓 (図5～14)

・1トレンチおよびA群9号墓 (図5・6)

1トレンチは、A群9号墓の前面に設定した幅2m×長さ2mのトレンチである。A群については、公開後も一般の立入りができない部分であり、案内板等の設置も予定されていないが、当横穴墓群の中で唯一造付石棺をもつものであることから、1か所のみ確認を行なうこととした。

調査着手前の横穴墓は、開口部では底面近くが最大で70cm近く埋没していた。また横穴墓前面の、トレンチを設定した犬走り状の部分は、崖面にあたり急激に落ち込んでいる。トレンチ底面までの掘削深度は横穴墓側では0.6mであるが、谷側では1.5mまで達する。

横穴墓は玄室奥壁側で幅2.4m・羨道付近で1.2m、全長4.8mを測り、平面形状はいわゆる逆台形を呈している。奥壁はアーチ形を呈しており、最高地点では羨道側に44cmほど傾いている。玄室と羨道の境は不明瞭であるが、現開口部付近の底面に弱い稜がみられこの辺りが境であったと考えられる。主軸方位はN-73°-Wで、底面の傾斜は約5°である。

玄室奥壁下に設けられた造付石棺は、玄室奥壁下に造り出されている。規模は幅2.3m、奥行0.8m、床面よりの高さ0.6mを測る。上面から1.8m×0.5m、深さ0.3mの隅丸長方形の棺が穿たれ、羨道寄りの上には幅5cmほどの溝が存在するが奥壁寄りでは検出されなかった。また、棺底中央より棺外に向かい小孔が貫通している。

1トレンチの調査では、横穴墓の前面で急傾斜となり谷側へ落ちていることが確認され、墓前域等と考えられる施設は確認されなかった。

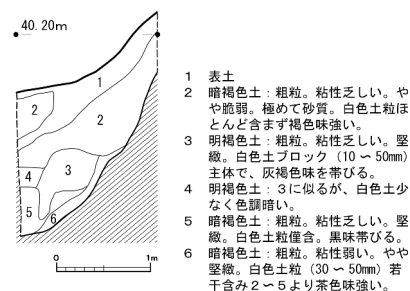


図5 1トレンチ土層断面

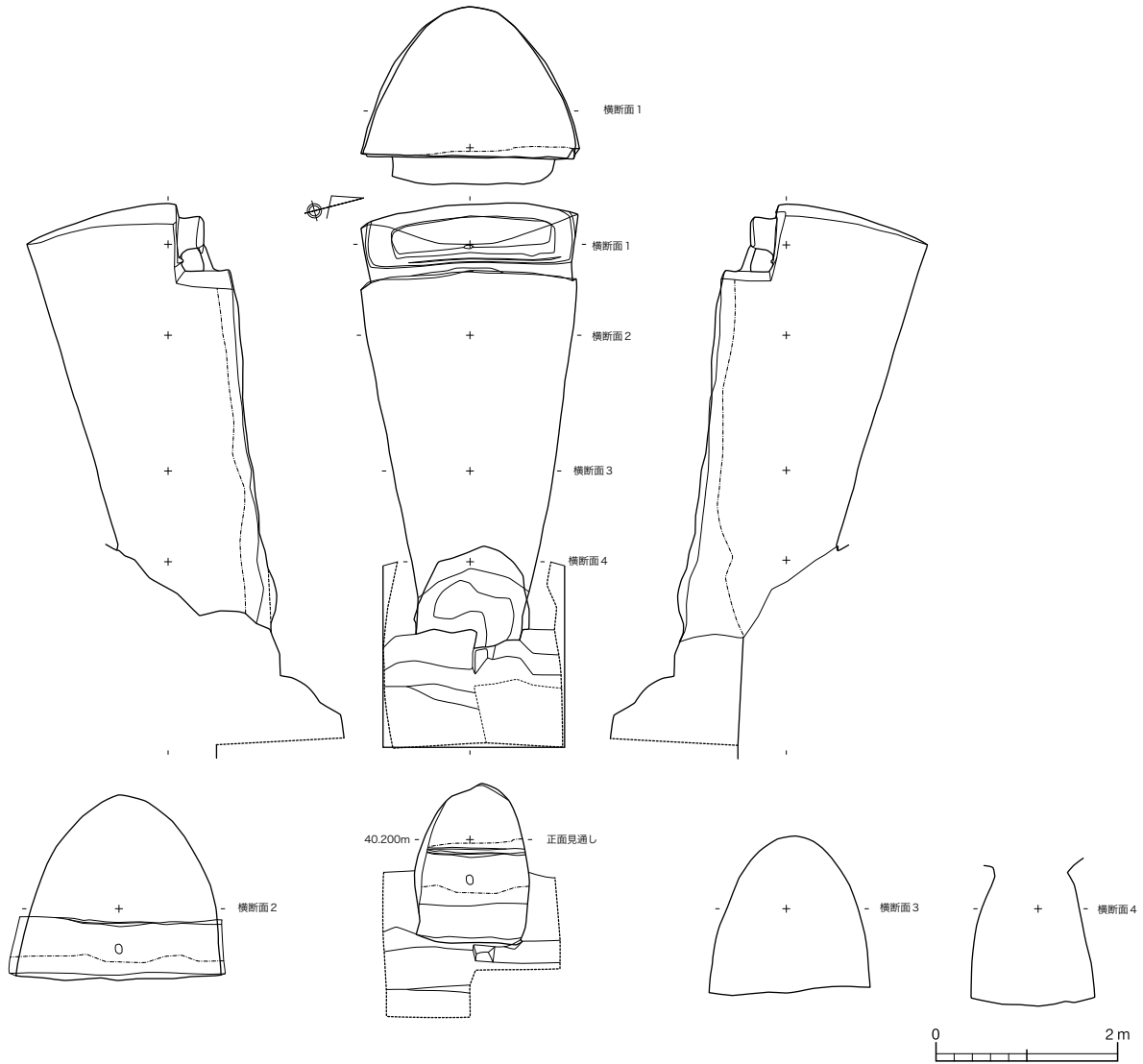


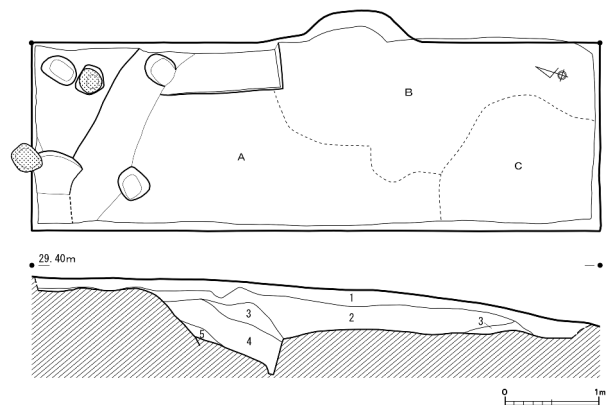
図6 A群9号墓

・2トレンチ (図7)

2トレンチは、A群の南側の平場に幅2m×長さ6mの範囲で設定したもので、この平場を囲むようにA群が展開していることから、横穴墓群に関連する施設が構築されている可能性も考えられた。A群との比高差は約10mである。

この付近は竹林となっていることから、トレンチ底面は竹根により著しく攪乱されていた。

調査の結果、トレンチ北側で人為的な段切りが施され、この付近でピット4穴が確認された。うち1か所には径30cm程の礎石様の扁平な石が据えられており、トレンチ北辺の地表にも同



- 1 腐植土
- 2 暗褐色土：粗粒。粘性乏しい。やや脆弱。白色粒子（5～10mm）若干含む。茶色味帯びる。
- 3 明褐色土：粗粒。粘性乏しい。やや堅緻。白色土塊（10～50mm）多含し、色調は白味帯び明るい。
- 4 黒褐色土：やや細粒。粘性有し、やや堅緻。白色土粒（5～10mm）・褐色土粒（1～5mm）僅含。黒味帯びる。
- 5 暗褐色土：やや細粒。粘性やや乏しい。堅緻。3に似るが白色土やや少なく粒径小さい（5～30mm）。

図7 2トレンチ

様の石が存在していた。段切り以南では、泥質砂岩ブロック主体の平坦面が広がるが、竹根の影響によりB部分では大きく攪乱を受け、またC部分では黒褐色土が主体となっている。泥質砂岩ブロックの下層を確認する目的で、トレンチ壁際の一部を掘り下げたところ、褐色味の強い土層となっていた。

トレンチ南側には石段の残骸およびその部材が散乱しており、明治時代初頭までこの場所に王子社が建っていた記録もあることから、これらの遺構は社に関わるものと推定される。

・ 3 トレンチ、4 トレンチ (図 8)

3・4 トレンチは、B群 2号・3号墓の2基の前面を網羅する形で設定したトレンチである。横穴墓の開口部に平行して幅1m×長さ4mの3 トレンチを、またこれにT字状に直交する幅1m×長さ1.5mの4 トレンチを設定した。

トレンチ底面は南に向かい傾斜し、地山までの掘削深度は3 トレンチ北側で0.6m、斜面下方の4 トレンチ東側で1.2mを測る。

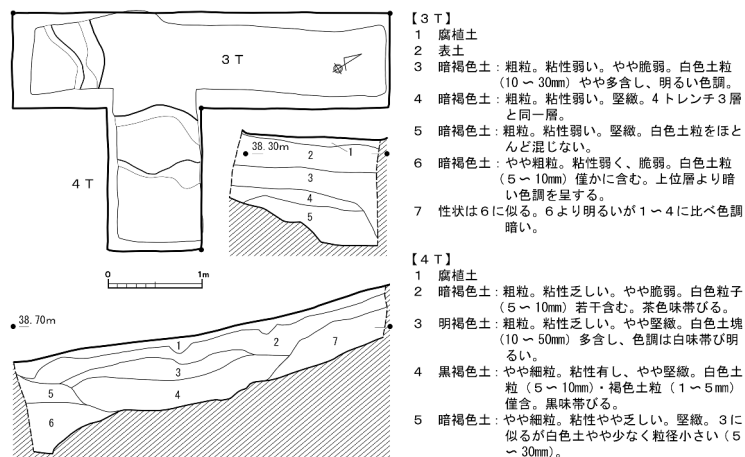


図 8 3・4 トレンチ

底面は、3 トレンチ北端より約3mのところ大きく傾斜し西側へ下り平坦面に至る。平坦面の一部しか検出できなかったが、B群 2号墓の位置からみて墓前域ないし墓道である可能性が高い。

・ 5 トレンチおよびB群 4号墓 (図 9)

B群 4号墓は、1～3号墓に比べ一段高い位置に存在し、開口部の前面は斜面となっていることから、この横穴墓の前面に2×2mのトレンチを設定した。

トレンチは、表層である腐食土を除去したのみで基盤層の地山が露出した。調査着手前の横穴墓は、若干の堆積土があるものの開口部がほぼ全開している状況であった。

玄室の平面は、奥壁側で幅2.5m、羨道側で1.9mを測る逆台形を呈し、奥壁は高さ2.0mのアーチ形を呈する。最高地点で羨道側に約10cm傾く。玄室の主軸方位はN-83°-Wで底面の傾斜は約8°の勾配をもつ。壁面にはいわゆる肋骨掘りと呼ばれる工具痕が顕著に残る。

奥壁より開口部方向へ2.8mの位置で、両側面下端に一辺20cm程の孔が穿たれており、閉塞施設の可能性も考えられる。また、開口部付近の底面にはテラス状の段を有している。

奥壁中央付近には幅0.8m・高さ0.6mのアーチ形の棺室入口がみられる。入口には、閉塞用の蓋を施していたと考えられる幅10cmほどの段を巡らせる。

棺室の平面形状は、1.8m×2.0m、高さ60～110cmの矩形を呈する。底面は凹凸が著しく全体的に中央がやや窪む。平均の傾斜は約5°を測る。壁面の下に肋骨状の工具痕が残る。棺室の中心軸は玄室主軸より南にあり、底面には溝等の付帯施設はみられない。

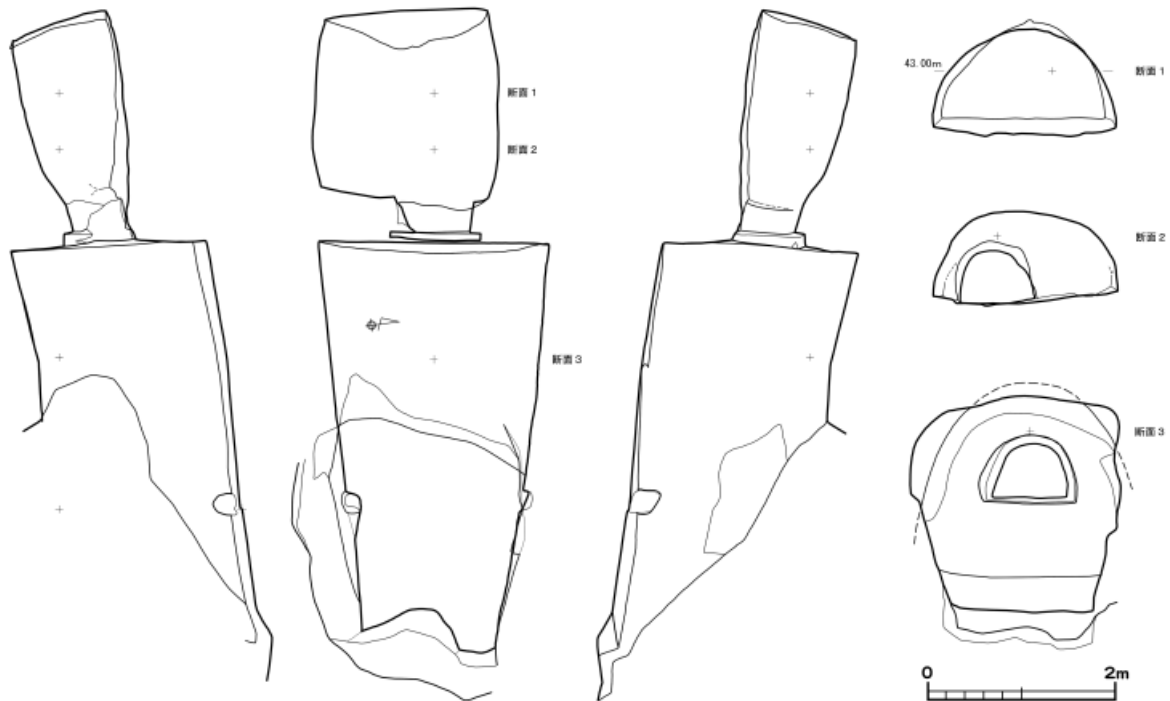


図9 5トレンチおよびB群4号墓

・6トレンチ (図10)

B群6号・7号墓の2基の前面を兼ねて設定したトレンチである。横穴墓の開口部に平行して幅1m×4mの範囲で調査を行なった。

調査の結果、トレンチ底面で4か所の平場が検出された。平場1は6号墓の前面に位置するもので、羨道である可能性が高い。覆土は2の単層であり、過去の調査の際に掘削されているものと考えられる。平場2・3はトレンチ北側の壁際で検出され、全体の様相は不明であるが、7号墓前面にテラス状に位置する。平場1と同様に羨道およびそこに至るステップ状の通路の可能性が高い。また、平場4は平場1および3の南側に位置する一段低い平場である。2基の墓前域または墓道である可能性が考えられる。

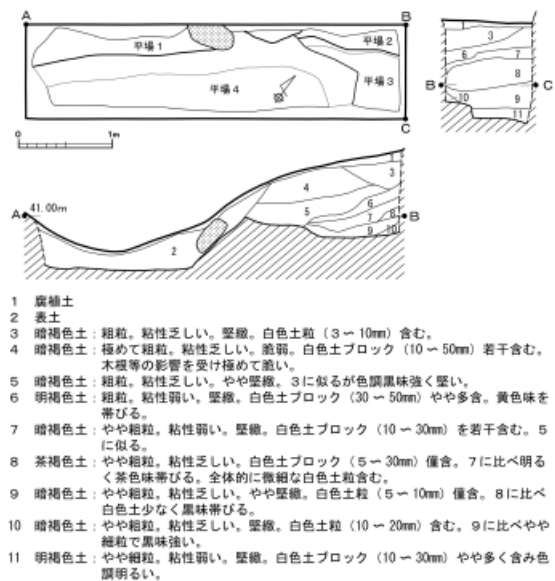


図10 6トレンチ

・7トレンチ (図11)

C群1号・2号墓の前面に、横穴墓の開口部に平行して幅1m×6mの範囲で設定したトレンチである。この位置は東・西側で尾根が張り出す小支谷状の地形をなしており、トレンチ東側では崖面となって立ち上がり、西側でも緩い勾配を持って崖面に至る。底面も表層下で基盤層が露出する浅いトレンチ

である。

底面には2か所の平場が検出された。平場1は幅約1.6mを測るもので、2号墓前面に位置し横穴墓右側壁がそのままトレンチ東側の崖面に続いている。平場2は平場1より20~30cm高いもので、幅1.2m程を測り北西方向へ延びている。また、平場2の南西側は勾配をもって南側へ傾斜する。

平場1についてはC群2号墓に直面することから、同横穴墓の墓前域である可能性が考えられる。一方、平場2については、延伸方向から1号墓へ向かっていると捉えられ、同横穴墓に至る墓道の可能性が指摘できる。

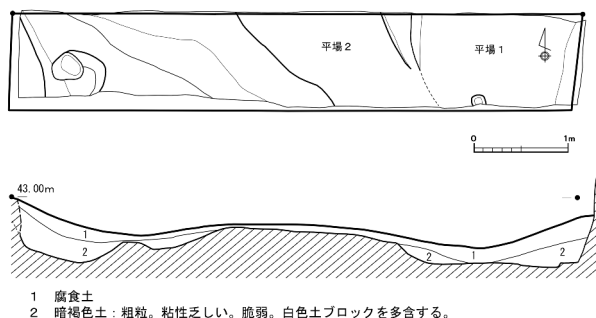


図11 7トレンチ

・ 8トレンチ (図12)

C群3号・4号墓の前面に設定した、幅1m×5mのトレンチである。

トレンチ中央付近では、既に基盤層が露呈しており、表出している部分は風化により表面が脆くなっている。

トレンチ底面は中央付近より西側に向かい緩やかに傾斜する。これに対し東側ではやや勾配をもって下がる。掘削深度は40~50cmである。

東側は4号墓の開口部に直面する部分にあたり、南北に比高差20cm程度の二段の平場が検出された。これらの平場は6、7トレンチ同様羨道あるいは墓前域である可能性が考えられる。

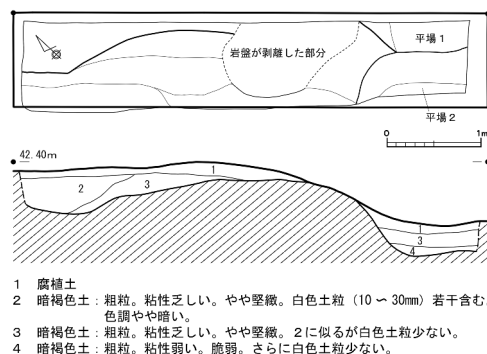


図12 8トレンチ

・ 9トレンチおよびD群1号墓 (図13)

9トレンチは、D群1号墓の前面に設定した、幅2m×長さ2mのトレンチである。調査前は、開口部のほぼ半分が埋没しており、横穴墓内の精査と前面の掘削を行なった。

玄室の床面には、奥壁より開口部側へ2.3mのところ幅10cm程の溝が横断する。この溝までの玄室の規模は、奥壁側で幅2.4m、羨道側で1.4mを測る。横穴墓の平面形状は逆台形を呈し、奥壁は高さ1.7mのアーチ形を呈する。奥壁はほぼ直立し、底面の傾斜は約5°を測る。壁面には肋骨状の工具痕が極めて顕著に残される。

奥壁中央付近やや上位には、幅0.6m・高さ0.5mのアーチ形の棺室入口がみられ、平面1.5~1.1m×1.6m、高さ55~85cmの矩形を呈する棺室が穿たれる。棺室の壁際および中央に幅0.1m、深さ5cmの溝が施される。

過去の調査報告には記されていないが、9トレンチを調査した結果、底面を横断する溝から0.4m外側の位置に稜が確認され、ここより底面が大きく傾斜することがわかった。

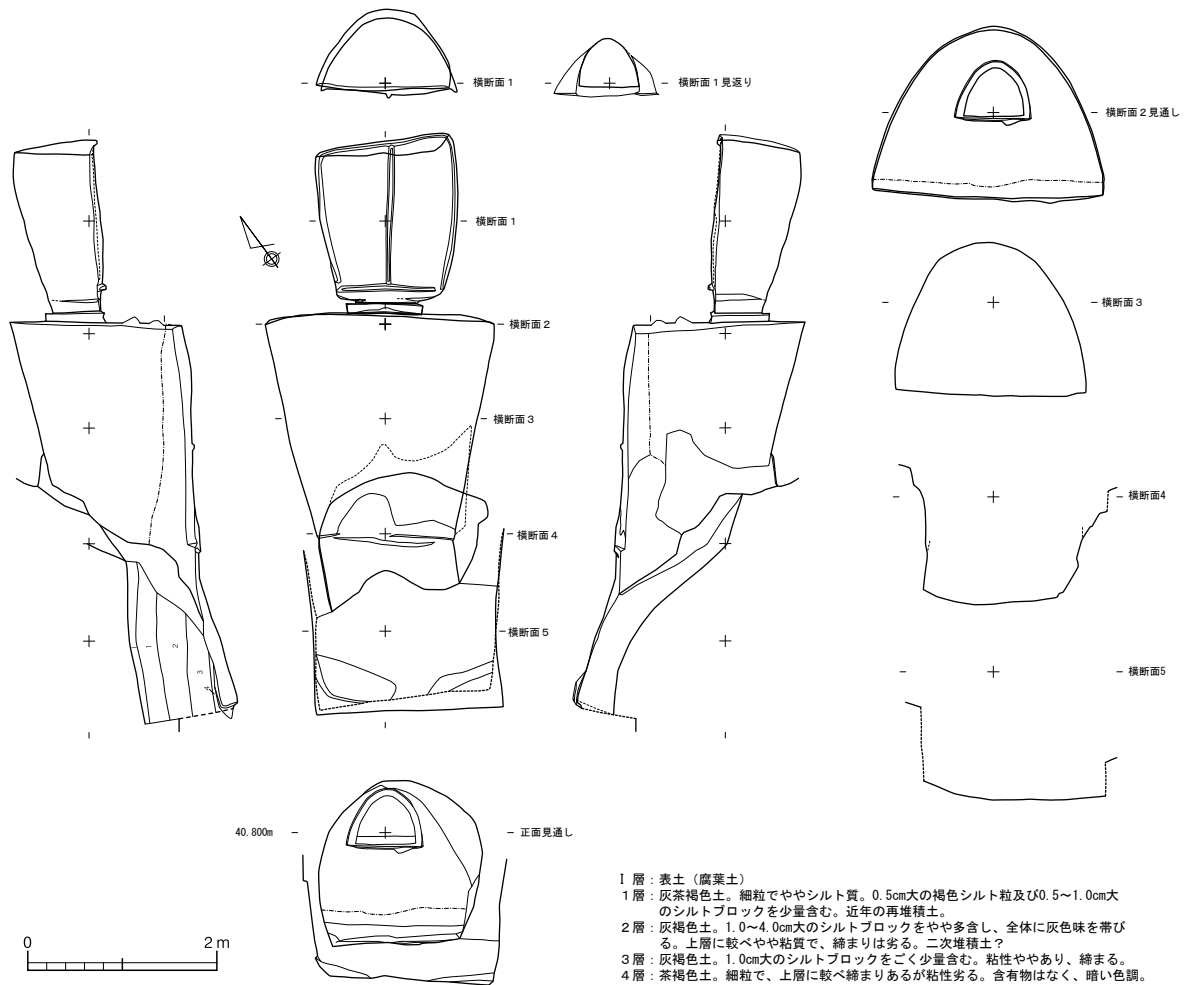


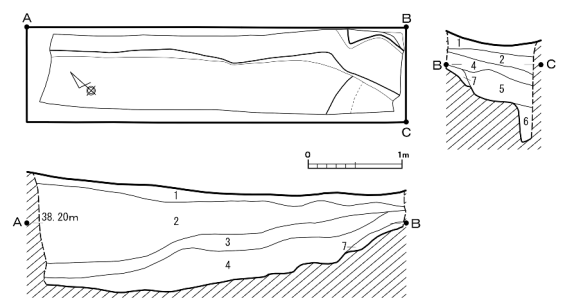
図13 9トレンチおよびD群1号墓

・10トレンチ（図14）

10トレンチは、案内板の設置予定位置に設定された幅1m×長さ4mのトレンチである。現況は、崖下の民地へ下る斜面にあたり、等高線に沿った狭小な小路となっている。

この部分は西に向かって下る斜面にあたる。斜面上位は深さ40cmで基盤層に達するが、下方では1.2mまで掘削したが基盤層には達しなかった。また、斜面に平行してクラック状の落ち込みがみられた。

調査の結果、トレンチ内には遺構と認められる掘込みは確認できなかった。



- 1 腐植土
- 2 暗褐色土：やや粗粒。粘性有。堅緻。白色土粒・褐色土粒若干含む。全体的に茶色味を帯びる。
- 3 明褐色土：粗粒。粘性乏しい。堅緻。白色土ブロック・粒やや多含し明るい色調。
- 4 明褐色土：粗粒。粘性乏しい。堅緻。3より白色土少なく、やや茶色味帯びる。
- 5 明褐色土：性状は3に似る。
- 6 暗褐色土：やや粗粒。粘性有。やや堅緻。白色土少なく暗い色調を呈する。
- 7 明黄褐色土：白色土ブロック主体。

図14 10トレンチ

第3節 出土遺物（図15）

今回の調査で出土した遺物は極めて少なく、横穴墓に伴うものは皆無であった。僅かに2トレンチお

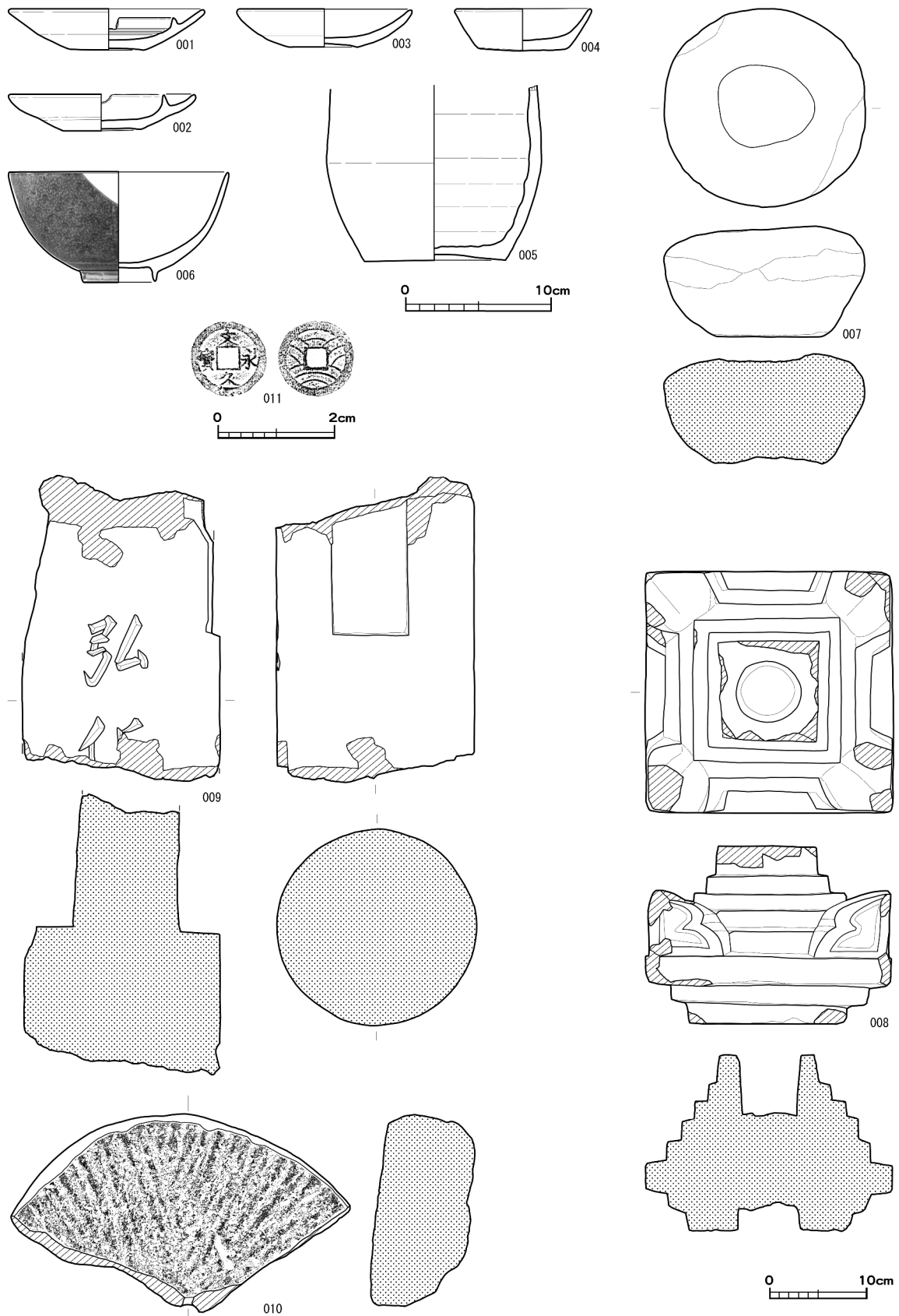


图15 出土遺物

よびその周辺より陶磁器および石造物を採集したので掲載する。

001・002は、灯明皿である。001は口径9.8cm、底径3.8cm、器高2.1cmを計る。口縁の一部を欠くが遺存状態は良好。外面体部及び内面に施釉する。002は体部の1/3を欠く。口径9.6cm、底径4.0cm、器高1.7cmを計る。内面及び外面口唇に施釉する。胎土緻密で焼成は良好。001は茶褐色、002は濃茶褐色を呈する。003は磁器の小皿である。約1/2を残存する。口径9.0cm、底径3.2cm、器高1.9cm。内面に有を施し、口唇に僅かな黒色物を付着する。胎土緻密で焼成は良好。灰褐色を呈する。004はかわらけで1/3を残存する。口径7.4cm、底径4.6cm、器高2.1cmを計る。粗砂、小石僅含し、焼成は良好。橙褐色を呈する。005は徳利の胴下半とみられ、底径7.2cm、器高8.9cmを計る。外面に鉄釉を施し、内面には轆轤痕を顕著に残す。細砂僅含し、焼成は良好。色調は茶褐色。006は染付碗で2/3を残存する。口径11.0cm、底径3.8cm、器高5.6cmを計る。胎土緻密で焼成は良好。色調は青灰色。

007は2トレンチ内より出土した水輪の完形である。径20.0cm、高さ11.1cm、重量5,950gを計る。最大径を上半にもつ。最大径付近は摩滅がやや激しく、面取り状をなすところもある。上下面とも中央が窪むがコンパス穴はみられない。008は宝篋印塔の笠である。24.3×24.7cm、高さ17.9cm、上面の孔径6.5cm、下面は6.3cm、重量1,250gを計る。階段状の段は上部で五段、下部二段を数える。隅飾りは若干外反する。2トレンチ周囲で表面採集した。009は同じく2トレンチ周辺で表面採集された石製の鳥居柱片で、径20.2cm、現存高30.4cm、重量16.0kgを計る。相対する二面に貫受けの臍穴が穿たれる。穴は幅4.0cm、現存する長さ14.0cm、深さ3.0cmである。穴と直行する面に「弘化」の銘が刻まれる。010は2トレンチ表土より出土した石臼の雄臼で、約1/3が遺存していた。径は40cmほどで、厚さ9.3cm、重量8,550gを計る。中央から周辺に傾斜し、雌臼と接する面は摩滅して滑らかである。中心部分に心棒を挿す穴が穿たれる。

011は文久3年（1863年）に初鑄された「文久永寶」の真文である。

第4章 まとめ

今回の調査は、現状保存されている横穴墓群の前面について遺構の有無を確認することが目的であり、一部を除き横穴墓の調査は実施していない。ただし、横穴墓の位置については、過去の調査報告には概略図しか掲載されておらず、位置関係が不明確であるため、今回の調査を機に測量を実施した。

各横穴墓の前面では、3トレンチ（B群2・3号墓）・6トレンチ（B群6・7号墓）および8トレンチ（C群3・4号墓）で、玄室底面から一段下がって平場が広がっていることを確認した。排土の都合上、この平場の斜面側端部を検出し得なかったが、通路あるいは広場状のものとなる可能性が高いと言えよう。また、同様の平場は7トレンチ（C群1・2号墓）でもみられたが、トレンチの位置が各横穴墓と若干離れているため、横穴墓底面から続く段は未検出であり、両者の関係を確認するには至らなかった。一方で、1トレンチ（A群9号墓）・9トレンチ（D群1号墓）では段を経て斜面となっている。1トレンチではその余地がないが、9トレンチにおいては崖面まで余裕があることから、この斜面が平場へと至る可能性は残る。

測量調査を実施した3基の横穴墓のうち、B群4号墓・D群1号墓は棺室をもつものである。これら棺室の入口には幅10cmほどの段を有しており、棺室を塞ぐ蓋状のものを設置していたと考えられている。今回の調査対象ではないが、B群1号墓の棺室前面に、板状の石造物が遺存していた。周辺部が弧状をなし、棺室入口の形状に一致しており、棺室入口の蓋と判断された。

下段に設定した2トレンチでは、人為的な段切りおよびこれに続く平坦面が検出された。段上位にはピットも穿たれ、過去に建造物が建立されていたことを窺わせる。トレンチ南には石階段の残骸が残されており、記録にある明治期に八幡社へ合祀された王子社（熊野社）の痕跡と考えられる。

参考文献

- 神奈川県教育委員会 1976 「神奈川県埋蔵文化財調査報告9 港南台」
- 桂町遺跡群調査団 1979 「横浜市戸塚区桂町遺跡群発掘調査報告書」
- 鶴沼女子高等学校地歴研究部 1964 「横浜市戸塚区独川流域の横穴墓群について」
- 横浜市上郷猿田遺跡調査団 1983 「上郷猿田遺跡」
- 横浜市教育委員会 2004 「横浜市文化財地図」
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1988 「横浜市栄区上郷町 上郷深田遺跡」

写 真



写真1 遺跡近景



写真2 1トレンチ調査前



写真3 1トレンチ調査終了



写真5 A群9号墓造付棺座全景

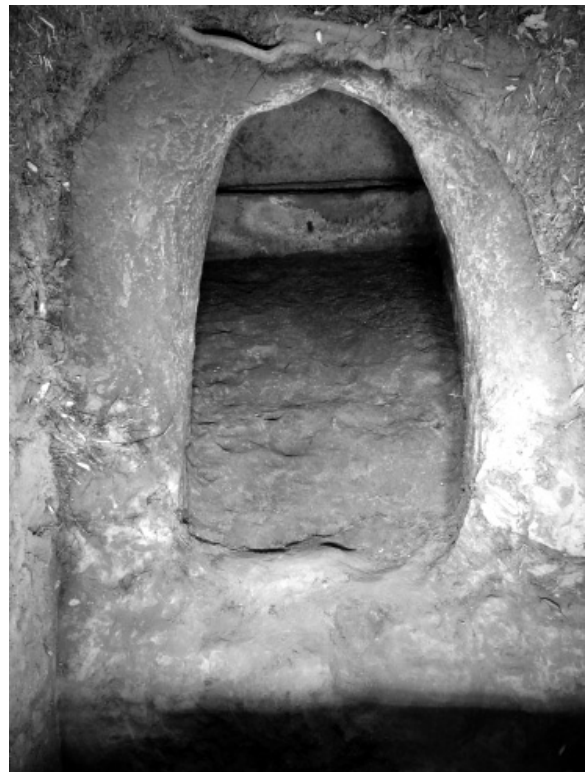


写真4 A群9号墓全景



写真6 A群9号墓造付棺座



写真7 2トレンチ調査前

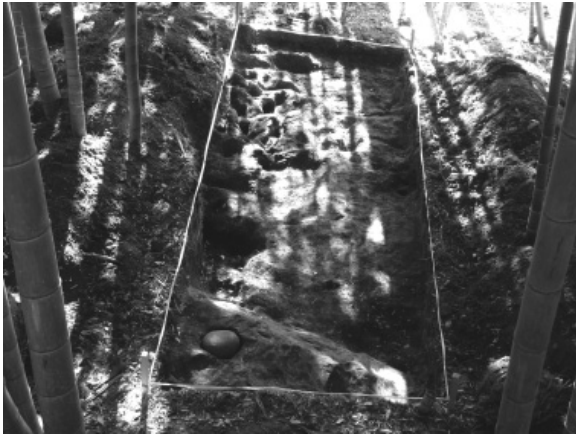


写真8 2トレンチ調査終了



写真9 2トレンチ北側部



写真10 3・4トレンチ調査前



写真11 3トレンチ調査終了



写真12 4 トレンチ調査終了



写真13 5 トレンチ調査前



写真14 5 トレンチ調査終了



写真15 B群4号墓全景



写真16 B群4号墓棺室



写真17 B群4号墓棺室内



写真18 棺室より外を望む



写真19 6トレンチ調査前



写真20 6トレンチ調査終了



写真21 7トレンチ調査前



写真22 7トレンチ調査終了



写真23 8トレンチ調査前



写真24 8 トレンチ調査終了



写真25 9 トレンチ調査前



写真26 9 トレンチ調査終了



写真27 D群1号墓全景



写真28 D群1号墓内

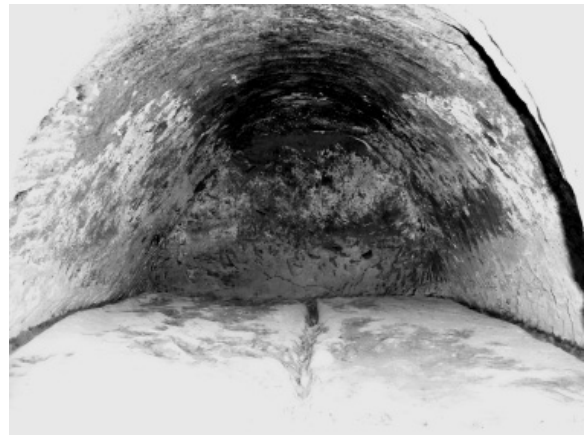


写真29 D群1号墓棺室内



写真30 D群1号墓棺室内排水溝



写真31 棺室より外を望む



写真32 10トレンチ調査前



写真33 10トレンチ調査終了



写真34 B群1号墓



写真35 掘削作業風景

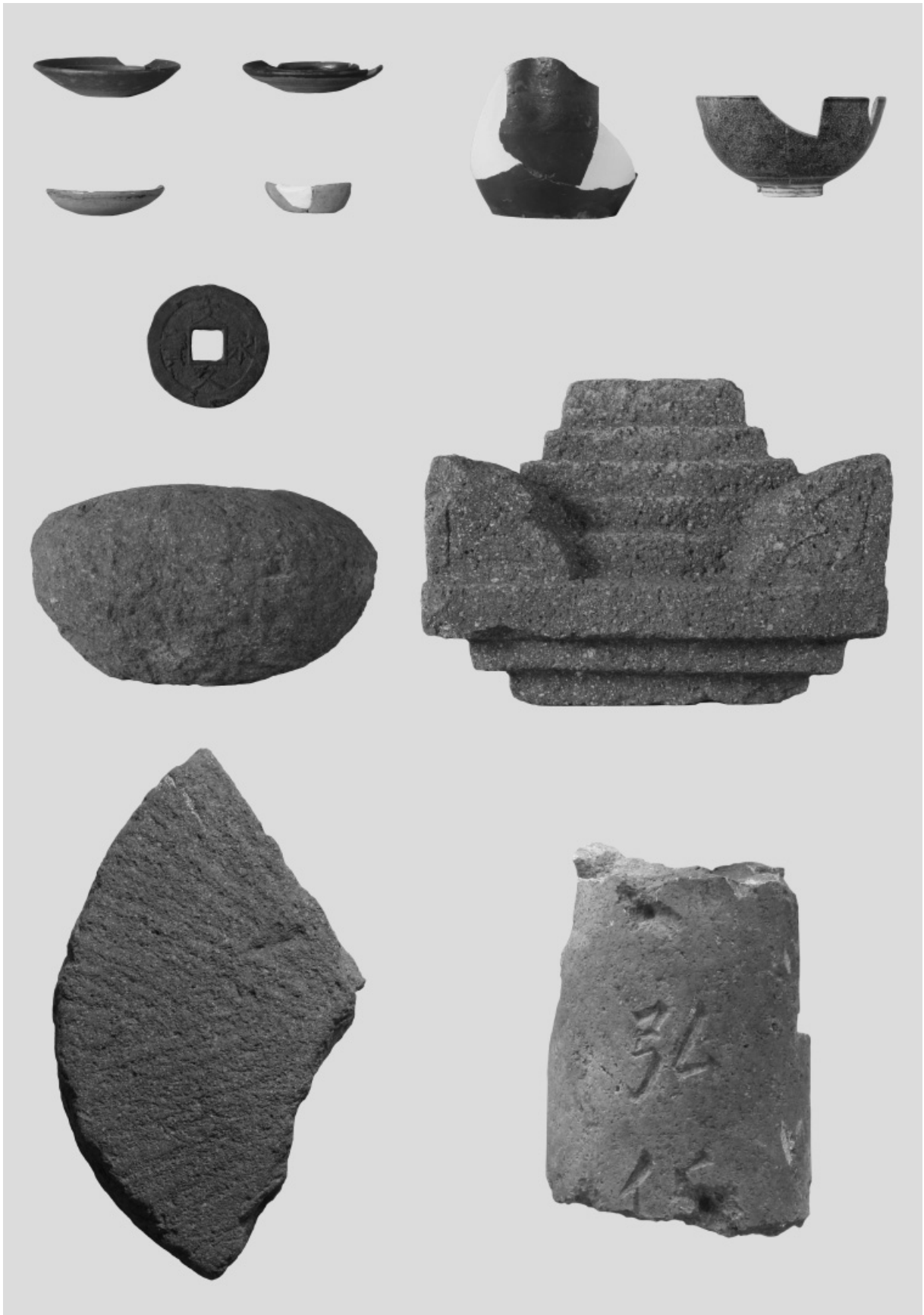


写真36 出土遺物

抄 録

ふりがな	みやのまえよこあなぼぐんかくにんちようさほうこく							
書名	宮ノ前横穴墓群確認調査報告							
副書名	鍛冶ヶ谷市民の森整備工事に伴う埋蔵文化財確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	橋本昌幸・鹿島保宏							
編集機関	公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター							
所在地	神奈川県横浜市栄区野七里2-3-1							
発行年月日	2014年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやのまえよこあなぼぐん 宮ノ前横穴墓群	かながわけん 神奈川県 よこはましをかえく 横浜市栄区 かじがやにちよう 鍛冶ヶ谷2丁 め 目275番地2	141151	栄区No.37 (神奈川県 遺跡番号)	35度 22分 8秒	139度 33分 42秒	2013.12.9 ~ 2014.1.10	74 m ²	公園整備
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮ノ前横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓ほか	陶磁器・石塔類・ 石製品等		横穴墓群の崖下に近 世以降の社跡が所在 していた。		

本書の印刷仕様について

紙質	表紙	レザック66年うすねず、四六判215kg
	見返し	上質紙A判57.5kg
	前文・本文・写真・奥付	マットコート紙四六判135kg
印刷	電算写植によるオフセット印刷	
刷色	墨一色	

文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合、この報告書の一部を複製して利用することができます。

なお、利用にあたっては、出典を明記して下さい。

この報告書にかかる遺物ならびに記録図面類（写真を含む）は公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センターで保管しています。原品を利用するには、別途利用申請が必要となります。

宮ノ前横穴墓群確認調査報告

—鍛冶ヶ谷市民の森整備工事に伴う埋蔵文化財確認調査報告書—

編集／公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター
〒247-0024 横浜市栄区野七里2-3-1 TEL 045(890)1155

発行／横浜市環境創造局

発行日／平成26年12月25日

印刷／株式会社ナデック